

稲敷市埋蔵文化財調査報告書第5集

茨城県稲敷市

中 城 古 墳 群

-携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財調査報告書-

2009

株式会社 ヒメノ
株式会社 地域文化財コンサルタント
稲敷市教育委員会

なか じょう こ ふん ぐん
中 城 古 墳 群

-携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財調査報告書-

2009

株式会社 ヒメノ
株式会社 地域文化財コンサルタント
稲敷市教育委員会

例　言

1. 本書は、KDDI株式会社の携帯電話基地局建設工事に伴う、茨城県稲敷市羽賀字中城1570番に所在する中城古墳群の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、株式会社ヒメノの委託を受けた株式会社地域文化財コンサルタントが、稲敷市教育委員会ならびに中城古墳群発掘調査指導委員会の指導のもと実施した。
3. 発掘調査は、平成20年（2008）12月5日～同年12月25日まで、整理調査は、平成21年（2009）1月5日～同年1月30日まで行った。
4. 調査面積は工事に係わる204m²である。
5. 調査は、野村浩史（株式会社地域文化財コンサルタント）が担当した。
6. 本書の作成は、株式会社地域文化財コンサルタントにおいて野村が行い、川村理華、藤井陽子、大間美穂の協力を得た。
7. 執筆は、Iのうち「調査に至る経緯」を稲敷市教育委員会、I「調査経過・II・III・Vを野村がそれぞれ分担し、検出された遺構の性格から「IV 羽賀城跡の構造と城域」を間宮正光氏（日本考古学会会員）にご寄稿頂いた。
8. 調査記録及び出土品は、一括して稲敷市教育委員会が保管・管理している。
9. 調査において下記の方々にご指導・ご協力を賜った。（順不同・敬称略）
茨城県教育庁文化課 稲敷市教育委員会 稲敷市立歴史民俗資料館 KDDI株式会社
株式会社ヒメノ 後藤孝行 人見暁朗 鈴木美治 苛原衛 間宮正光 芦田和義
10. 調査の参加者は次の通りである。（順不同）
田沼清 高野浩之 大橋生 小林嵩 深山恒男 斎藤次雄 泉祐司

凡　例

1. 調査において使用した略号は次の通りである。
中城古墳群…ナカジョウコフングン 堀跡…SD ピット…P
2. 調査は、世界測地系に基づく座標及び水準点を設置し基準とした。遺構実測図中の断面図に記した数値は標高、方位は座標北を示す。
3. 遺構の規模は、壁上端を計測し、長軸線が座標北に対して何度偏針しているかを記載した。深度については検出手面を基準として計測している。
4. 土層の色相は、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版標準土色帖』を使用した。
5. 本書に用いた挿図縮尺は次の通りである。 全体図…1:100 堀跡…1:80 遺物…1:3
6. 本書に用いた のアミかけは纖維混入を示す。
7. 掲載した遺物、番号を付しており、本文・挿図・図版共に一致させている。
8. 調査資料の扱いについては巻末に一括して記載した。

目 次

例言

凡例

目次

I 調査の経緯と経過

調査に至る経緯 1

調査経過 1

II 遺跡の位置と環境

遺跡の位置 3

歴史的環境 3

III 調査の方法と成果

調査の方法 5

遺構と遺物 7

IV 羽賀城跡の構造と域域 9

V 総括 12

写真図版

抄録

資料の取扱い

挿図目次

第1図 遺跡の位置 2 第5図 調査区全体図 6

第2図 遺跡周辺の地形 2 第6図 1号堀跡、出土遺物 8

第3図 周辺の主な遺跡 4 第7図 羽賀城跡概念図 10

第4図 調査区設定図 5 第8図 長峰城跡概念図 11

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表 4 第2表 ピット計測表 8

写真図版目次

図版1 調査区全景 遺跡遠景 調査区北西側全景 調査区北東壁土層断面 調査区北西壁土層断面

図版2 1号堀跡全景 同土層断面 1号堀跡ピット群全景 1号堀跡P09土層断面 1号堀跡内土坑
(SK01)全景 中城古墳現況 出土遺物

I 調査の経緯と経過

調査に至る経緯

平成20年5月22日付けで、株式会社ヒメノ東京本社（以下「(株)ヒメノ」）よりKDDI携帯電話基地局設備建設に伴い、稲敷市教育委員会（以下「教育委員会」）に対して、稲敷市羽賀字中城1570番地内における埋蔵文化財の有無及びその取扱いについての照会があった。当該地は周知の遺跡「中城古墳」に近接することにより、事業計画の変更及び建設場所の移動か文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が必要である旨回答した。

この後建設場所を変更しての工事を開始したが、同年11月10日、「(株)ヒメノから地山掘削工事中に溝らしきものを発見したとの報告を受けた。教育委員会は、現地確認調査を行い、掘削壁面及び露呈プランから墳墓に係わるL字形周溝部と判断し、「(株)ヒメノから「遺跡新発見届出」が提出された。新遺跡は、単独古墳から「中城古墳群」と変更され、遺跡エリアも拡大された。

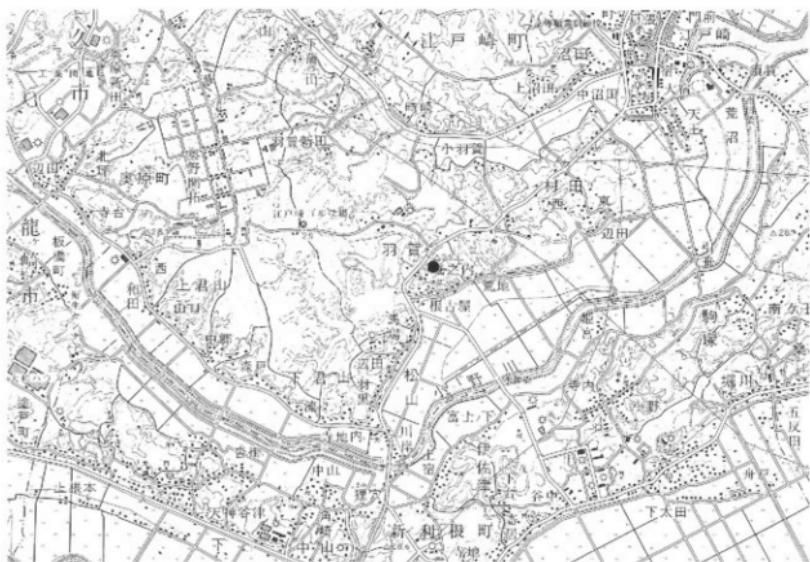
教育委員会は、現状保存等について指導助言をしたが、事業計画の変更が無理であり、記録保存が望ましいと判断した。調査は同年11月10日付けで埋蔵文化財発掘の届出を行い、発掘調査は、事業者の委託を受けた株地域文化財コンサルタントが実施することとし、教育委員会は中城古墳群発掘調査指導委員会を設け、事業者・調査機関との三者協定を締結した。発掘調査は本遺跡発掘調査仕様書に基づき、同年12月5日より開始し、平成21年3月31日までに報告書を刊行するとの内容に至った。

調査経過

調査は、平成20年12月5日～同年12月25日まで現地作業を行い、終了書類提出の後整理調査を開始した。整理調査は、平成21年1月5日～同年1月30日まで実施し、稲敷市教育委員会の査読を受け印刷・発行した。

以下は、調査日誌抄である。

- 12月5日 調査を開始する。調査区北西側は工事により失われていたため、南東側の表土除去作業を重機を用いて慎重に行う。検出された遺構は、掘削された部分で確認される断面形状から堀跡と判断し、人力による掘削を開始した。
- 6日 1号堀跡を完掘し、写真撮影により記録作業を行う。
- 7日 1号堀跡の平面図実測を行う。
- 9日 1号堀跡の土層断面図作成。
- 12日 1号堀跡内土坑・ピットの断面図作成。
- 18日 調査区北西壁の土層断面図作成。
- 25日 茨城県教育庁文化課ならび稲敷市教育委員会より終了確認を受ける。この後、終了書類を関係機関に提出する。
- 1月5日 整理調査に着手する。
- 30日 整理調査を終了し、この後、稲敷市教育委員会の査読を受け印刷に取りかかる。



第1図 遺跡の位置（国土地理院作成 1:50,000「佐原」）



第2図 遺跡周辺の地形（明治14年測量迅速測図 1:20,000「江戸崎村」「根本村」）

II 遺跡の位置と環境

遺跡の位置

中城古墳群の所在する稲敷市は、茨城県の南部を占め、平成の大合併によって、平成17年3月に江戸崎町・東町・新利根町・桜川村の3町1村が合併して新たに誕生した市である。

遺跡は、新たな市域の西部に位置しており、旧の行政区画では江戸崎町に所在する。

市域の地形は、霞ヶ浦沿岸の沖積低地、標高20~30mの稲敷台地、稲敷台地を浸食して流れる小野川など小河川流域の沖積低地、利根川周辺の沖積低地とに大別される。稲敷台地は、縄文期の海進海退と小河川により形成された安定した台地で、樹枝状に発達した小支谷が複雑に入り込んでいる。

遺跡は南に小野川を臨み、北西を小支谷によって浸食された、標高28m程の台地上に立地し、江戸崎町市街地の南方約3km、利根川に架かる長豊橋の北方約7kmに位置している。

歴史的環境

小支谷によって浸食された稲敷台地は、遺跡の宝庫といっても過言ではなく、小野川を望む台地上には、原始からの営みが確認される。本項においては、中城古墳群が所在する羽賀地区を中心として、旧江戸崎町の遺跡を概観してみたい。

縄文時代においては、土器標識となった学史に残る遺跡が点在し、貝塚も多く周辺では村田・吹上・神田貝塚などが知られ、狸崎・原南・塙の各遺跡においても地点貝塚が営まれたとみられている。

弥生時代になると遺跡数は減少し、小野川下流左岸の橋の台古墳群・大日山古墳群・恩川遺跡・秋平遺跡の発掘調査によって遺構の存在が明らかとなっている。羽賀地区周辺の分布調査では、権現塚古墳群・宮台遺跡のみで遺物が採取されることから、旧町域のなかでも弥生時代の文化圏は、主に霞ヶ浦周辺及び小野川河口付近に形成された可能性を示している。

古墳時代に入ると、水系を臨む台地上に集落が営まれたと推測され、墓域である古墳も多く確認される。旧江戸崎町域には、本遺跡を含め16古墳群が知られており、全体では100基近く、あるいはそれを超える古墳が築造されたとみられる。本調査区の北には、隣接して中城古墳が存在し、北西に小支谷を挟んで木納場古墳群が位置するが、周辺では荒地・荒地平・大日・亀ヶ谷城・大塚古墳などのように単独で所在する傾向を示す。多くは円墳と考えられている。

律令制下においては、信太郡の郡衙が置かれており、小野川を跨った左岸の下君山地区が有力視されている。当地には、郡寺と目されている下君山廃寺があり、常陸国分寺系の素縁複弁十葉軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦や塔心礎が発見されている。周辺の台地上からも墨書き土器を含む多量の遺物が採取されるなど、大規模集落の埋蔵が示唆される。

中世になると、小野川を臨む小支谷に浸食された台地上には、先端部を利用して城館が営まれている。本遺跡の南に隣接する羽賀城跡のほか、北東に亀ヶ谷城（中峰遺跡）、南西に森戸城（二条城）が位置する。羽賀城の城主は、室町期に関東管領山内上杉氏の常陸南部における先鋒的役割を果たした「信太庄山内衆」の構成員、戦国期には江戸崎に本拠を置く土岐氏の被官となつた臼田氏で、小田原合戦の後帰農し、現在、茨城県の中世史研究に欠くことのできない「臼田文書」と呼ばれる家伝史料を伝えている。



第3図 周辺の主な遺跡（「茨城県遺跡地図」を基に作成 1:25,000）

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	秦・半			旧石器	縄文	弥生	古墳	秦・半	中世
1	中城古墳群			○		○	24	上君山栗山遺跡						○
2	中城古墳群			○			25	山王吉遺跡						○
3	羽賀城跡				○		26	大日峯古墳群						○
4	北越古墳群			○			27	沼口古墳群						○
5	荒差古墳群			○			28	神明平遺跡群						○
6	高野遺跡群				○		29	神田遺貝塚				○		
7	木納場古墳群			○			30	山後遺跡						○
8	大塚古墳群			○			31	山後古墳群						○
9	觀音遺跡群			○		○	32	大日吉古墳群						○
10	泡白遺跡群	○			○	○	33	羽賀栗山遺跡群				○		
11	香取古墳群			○		○	34	龜ヶ谷城古墳群						○
12	板塚遺跡群			○		○	35	栗山遺跡群				○		
13	小山遺跡群			○		○	36	村田貝塚				○		○
14	樺原塚古墳群		○	○	○	○	37	豆美加遺跡群				○		○
15	地福院跡				○		38	見松遺跡群						○
16	明神古遺跡群		○		○		39	見曉塚古墳群						○
17	岩ノ内遺跡群		○		○		40	中峰遺跡群				○		○
18	下岩山廬寺跡				○		41	鳴遺跡群				○		○
19	木瓜遺跡群				○		42	那賀宮遺跡群				○		○
20	宮台遺跡群		○	○	○		43	湯崎遺跡群				○		○
21	原ノ前遺跡群			○		○	44	勝白遺跡群				○		○
22	森戸城跡				○		45	寺内遺跡群				○		○
23	中根台遺跡群			○	○		46	道成寺貝塚				○		○

III 調査の方法と成果

調査の方法

調査は、事前の工事による掘削によって視認し得た堀跡が主な対象となった。

調査区北西側は工事のため既に重機により15mの深さまで掘り下げられ、堀跡の底面まであと20cmに達していたが、辛うじて遺構の全容を知ることができた。堀跡は、北西側のコーナーが明瞭に検出されていた。堀底を確認する作業は人力によって行い、最終段階でサブトレーナーを掘り下げ構築面を再確認した。

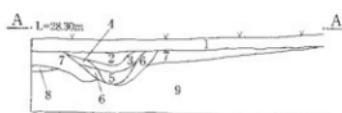
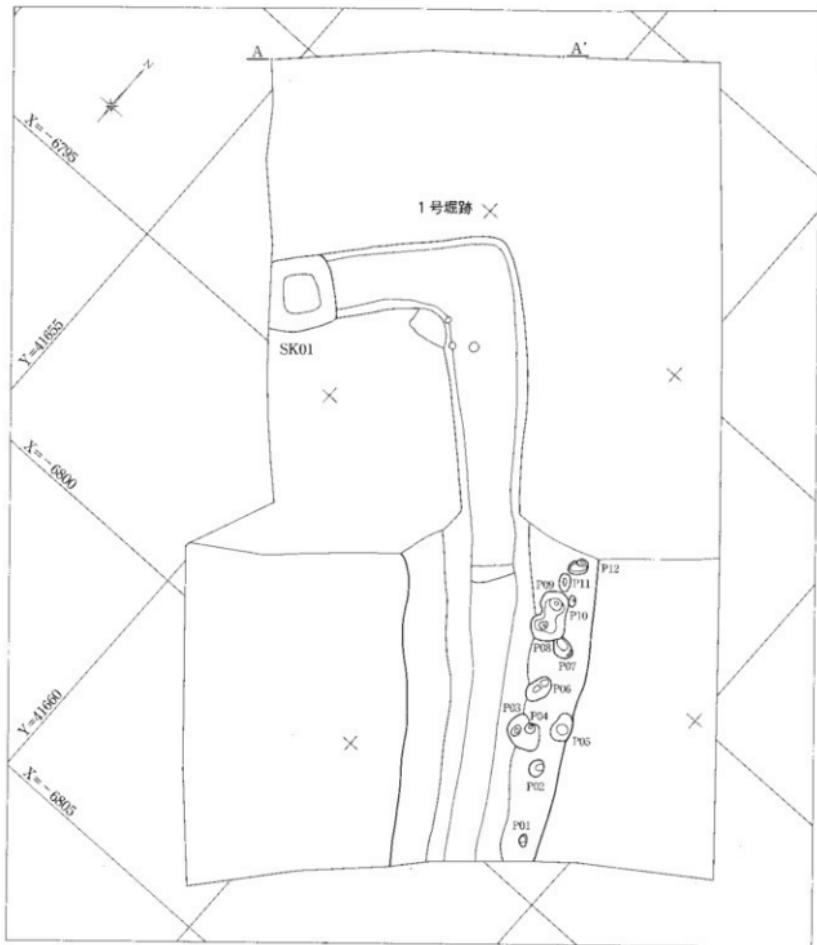
調査区南東側では、重機による表土除去後、人力での掘削を実施した。この後、世界測地系に基づき座標及び水準点を設置し、南東と南西面で堀跡の土層断面を観察しながら記録を探った。堀跡の東側壁面には柱穴が確認されたので、併せて土層断面の記録作業を行っている。

記録は実測と写真撮影で対応している。実測図は1:20の縮尺を基本とし、平面実測には光波測量器を用いた。なお、土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版標準土色帖』に掲っている。写真撮影は、調査段階に応じて白黒35mm、カラーリバーサル35mm、調査記録補助としてデジタルカメラを用いた。

整理調査は発掘調査によって得られた出土品及び記録を対象として行った。作業は、遺物水洗い・注記・接合・実測、図面・写真の整理へと進め、調査資料を分析して報告書にまとめた。



第4図 調査区設定図（江戸崎都市計画図 1:2,500）



第5図 調査区全体図

遺構と遺物

検出された遺構は空堀 1 条で、覆土中より縄文土器片と円筒埴輪片が出土している。調査区北西際における断面観察では、古墳の周溝の可能性がある幅1.95m、深さ0.65m、断面U字状の掘り込みを確認したが、表土直下に検出されていること、時期不明の整地層を掘り込んでいることから周溝以外の遺構と理解した。調査区の北西半分は既に失われていたため、積極的に古墳に関連する遺構は検出されていない。

なお、基本堆積土層は、表土下の黒褐色土・褐色土を経てローム層となり、灰白色粘土層に達している。

1号堀跡

調査区中央にL字状に確認され、南東及び南西側へとさらに延びる。南に隣接する中世城郭の羽賀城跡と関わる空堀跡とみられる。調査区北西側の約1/2は既に工事により掘削を受けており、底部のみの検出であった。検出された全長は17.60mで、走行方向はN—40°—Wから130°—Wへほぼ直角に向きを変える。断面形は逆台形状に近く、水平方向を基準とした場合の傾斜角度は、堀跡の東側(外側)が50°、西側(内側)が55°である。規模は、上端幅3.15~4.00m、下端幅0.65~1.30mを計測し、北西部分においては下端幅が広くなることから、上端幅も比例して広くなるものと推測される。土層断面にみる掘り込み深度は1.65mである。構築にあたって南東側は灰白色粘土層直上のローム層で止まっているが、北西側は灰白色粘土層まで達していた。覆土は、暗褐色土とにぶい黄褐色土に大別される。覆土8~10層のにぶい黄褐色土は、いずれもローム粒及びロームブロックを多量に含み、西側からの堆積状況を示すことから、西側には土壘が存在したものと判断された。

堀跡の東側上端には、12基のピットが掘り込まれ、櫛あるいは逆茂木が設置されたとみられる。規模は、第2表にまとめたが、長軸24~70cm、短軸12~52cm、深さ28~76cmを計測し、小型のものは底面が尖り杭状を示している。柱間寸法はまばらで、深度も50cm台以下と浅めであることから逆茂木の可能性が高いのではないかと考えられる。覆土はローム粒・ロームブロックを含有したにぶい黄褐色土あるいは暗褐色土である。さらに、南端部の堀底からは方形の土坑(SK01)が灰白色粘土層を掘り込み検出されている。規模は、東西1.30m、南北1.50m、堀底からの深度は0.55mで、覆土はローム粒及びロームブロックを含む暗褐色土であった。茨城県龍ヶ崎市に所在する屋代城跡(屋代B遺跡)では、堀底から方形の竪穴遺構(陥穴)が検出されており、城の防御施設の一種と考えられているが、今回検出された遺構は規模が小さく、粘土層を掘り込んでの構築から排水などの機能を担っていたものと推測される。

遺物

遺物は、縄文土器片1点・埴輪片3点の計4点が出土し、中世に帰属する遺物は得られていない。

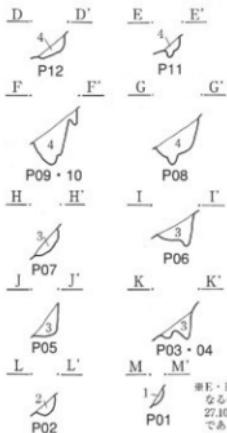
1は、縄文土器深鉢類の胴部片で、1号堀跡の南西側覆土中からの出土である。外面に粗い無節縄文を施し、前期黒浜式土器とみられる。器高は残存で2.9cm、胎土は石英、砂粒、纖維を含む。焼成はやや悪く、色調は外面が褐色(7.5YR4/6)、内面が黒褐色(7.5YR3/1)である。

2・3は、円筒埴輪の胴部片で、1号堀跡南東側覆土中からの出土である。外面に継ハケ、内面に指ナデを施す。2cm幅におけるハケ目数は12本である。2の器高は残存で4.8cm、径は復元で18cm、厚さ1.5cm、3の器高は残存で5.7cm、径は復元で25cm、厚さ1.3~1.5cmを測る。2・3共に胎土は石英、白・黒・赤褐色粒を含み、焼成は良好で、色調は橙色(7.5YR7/6)である。

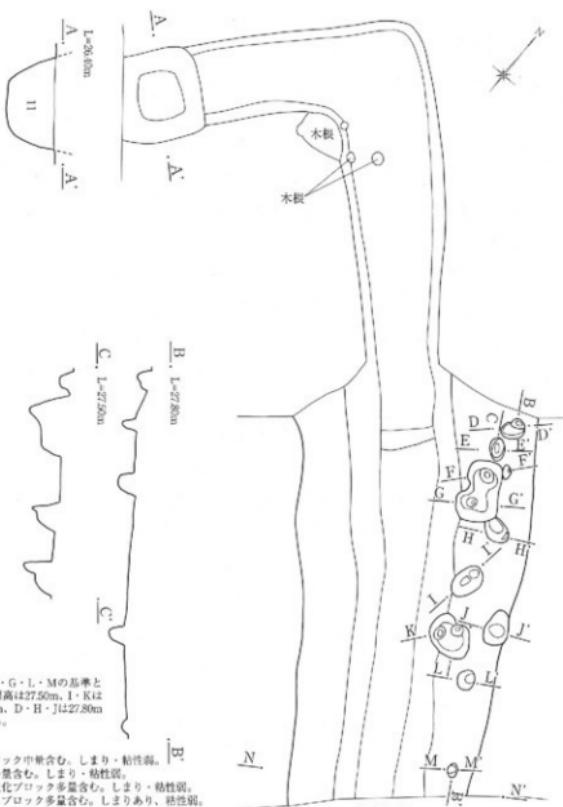
第2表 ピット計測表

単位=cm

番号	長軸	短軸	深さ
P01	24	16	28
P02	34	30	32
P03	58	36	57
P04	56	30	46
P05	58	40	55
P06	60	34	54
P07	48	34	44
P08	70	52	76
P09	58	50	82
P10	24	12	28
P11	38	24	35
P12	42	32	39



図E・F・G・I・Mの基準となる標高427.50m、L・Kは27.10m、D・H・Jは27.80mである。

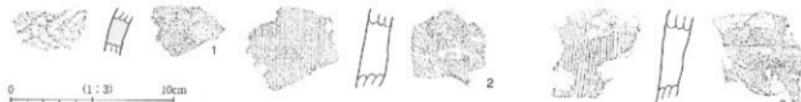


1号堀跡土質説明

- 1 砂 黄褐色 土 10YR3/3 表土。ロームブロック中等含む。しまり・粘性弱。
- 2 貧 黄褐色 土 10YR5/6 ロームブロック多量含む。しまり・粘性弱。
- 3 砂 黄褐色 土 10YC3/3 地上ブロック、炭化ブロック多量含む。しまり・粘性弱。
- 4 砂 黄褐色 土 10YC3/4 ローム粒・ロームブロック約1~10mm中量含む。しまりあり・粘性弱。
- 5 砂 黄褐色 土 10YC3/4 ローム粒・ロームブロック約1~10mm中量含む。しまり・粘性弱。
- 6 砂 黄褐色 土 10YR3/4 ローム粒・ロームブロック約1~10mm中量含む。しまり・粘性あり。
- 7 砂 黄褐色 土 10YR3/3 ローム粒・ロームブロック約1~10mm中量含む。しまり・粘性あり。
- 8 にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ロームブロック約1~50mm多量含む。しまり・粘性あり。土層崩落土。
- 9 にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ロームブロック約1~30mm多量含む。しまり・粘性あり。土層崩落土。
- 10 にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ロームブロック約1~20mm多量含む。しまり・粘性あり。土層崩落土。
- 11 砂 黄褐色 土 10YR3/4 ローム粒・ロームブロック約1~10mm多量含む。しまり弱、やや粘性あり。

ピット土壤剖面

- 1 にぶい黄褐色土 10YR4/3 13~1ム粒・ロームブロック約1~30mm多量含む。しまり弱、粘性あり。
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3 13~1ム粒・ロームブロック約1~50mm多量含む。しまり弱、粘性あり。
- 3 にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ロームブロック約1~10mm中量含む。しまり弱、粘性あり。
- 4 砂 黄褐色 土 10YR3/3 ローム粒・ロームブロック約1~10mm中量含む。しまり弱、粘性あり。



第6図 1号堀跡、出土遺物

IV 羽賀城跡の構造と城域

羽賀城跡は、霞ヶ浦へ注ぐ小野川流域の沖積低地を眼下に臨む、半島状台地を中心に機能した在地土豪の居城である。いつ誰によって築かれたのかは定かでないが、「臼田文書」によると最後の城主は臼田左衛門尉で、天正18年（1590）の小田原合戦直後に廃城となっている。

臼田氏は、信濃の豪族滋野氏の流れを汲み、八ヶ岳の麓に広がる佐久地方の臼田を本貫の地とした。14世紀後半に上杉憲定から信太莊の布作郷（茨城県美浦村）に領地を与えられるが、臼田氏はどのような経緯で羽賀郷を本拠とし、この城を居城としたのかは明らかではない。戦国時代には小田原北条方として活動する土岐氏の重臣となって、七代目に小田原合戦を迎える。戦後、臼田氏は、主家が没落するなか、土着・帰農の道を歩み、信濃以来続いた領主としての営みは幕を降ろした。

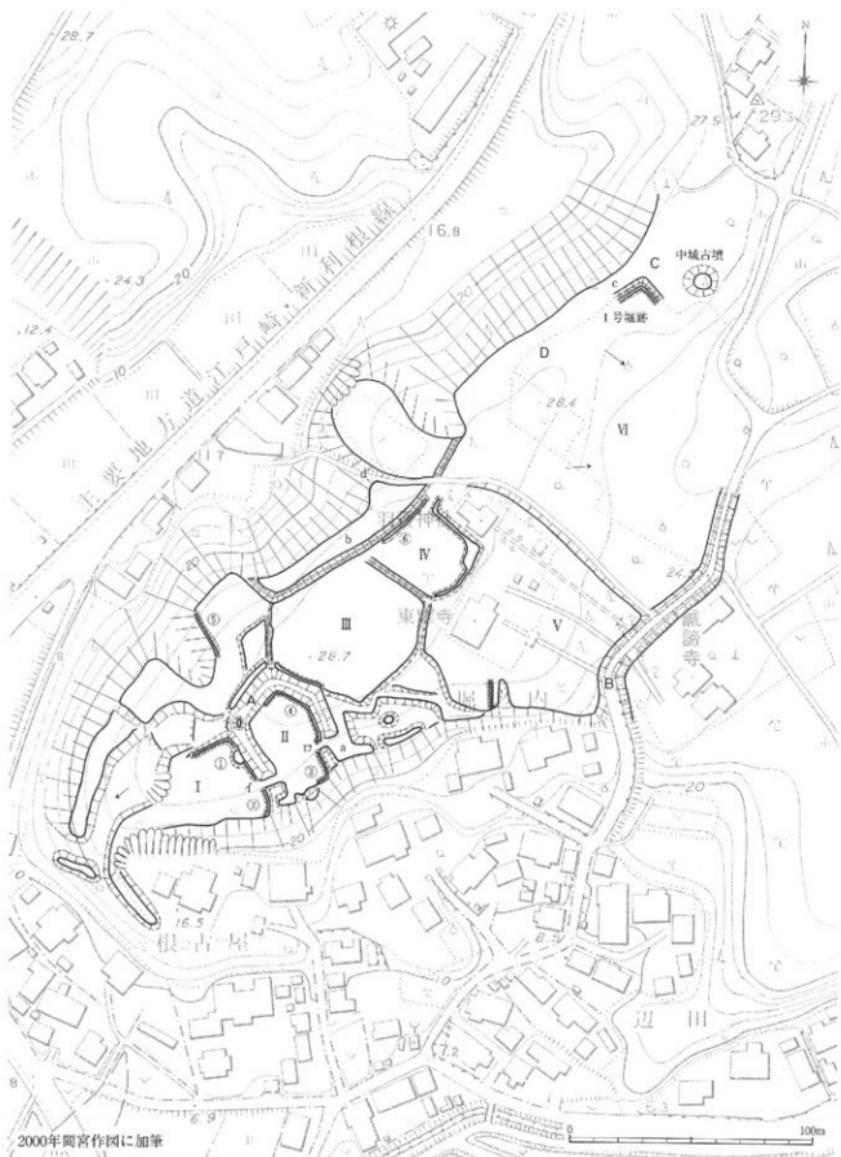
城は、比高差約12~19mの台地上を要害とし、麓を居住空間とする二元構造と推定される。今に残る字名の根古屋・堀之内はこれを裏付けるものであろう。全体としては、台地の先端に主郭を置き、周囲を帶あるいは腰曲輪で補強しながら、横堀を多用しつつ空間を限定し、順次下位の曲輪を連ねる。

第7図を基に概観すると、主郭は曲輪Ⅰに相当する。この曲輪は後世に南と西側の一部が壊されているものの、曲輪Ⅱと形状及び軸線を揃え、共に東辺の南寄りに虎口I・ロを設け、土橋によって下位の曲輪と連結するなど共通性を認めることができる。両者は同一設計の基に築かれたとみてよからう。曲輪Ⅲ・Ⅳの成立についてはこれ以前に遡るのか、あるいは隨時拡張された結果なのかは不明といわざるを得ないが、北に偏在して占地することから、曲輪Ⅰ・Ⅱとの時間差を示すものと考えられる。曲輪Ⅱの虎口ロには横矢が掛けられ、前面に馬出状の小空間aを構える。曲輪ⅠとⅡを分断する堀Aは曲輪Ⅱを取り巻き、現況で幅約8~10m、深さ3~5mを計測するなど高い防御力を誇り、戦国期の所産と考えて大過ないと思われる。土堤については、曲輪Ⅰの東辺に高さ2.5mで塚状の構築物①を確認できるが、櫓台的な機能を担っていたのか、これを除く②~⑥の土星は部分的な残存で遺存状態は悪い。後世の改変により失われたとも考えられようが、城全城の状況や曲輪内の面積から察すると、当初より大型土星は築かれず、小型土星あるいは櫓を用いていたとも解釈できる。また、曲輪Vとなる羽賀神社及び東羅寺周辺も曲輪として機能していたと想定されるも、台地下の集落部分と共に改変が著しく現況からの判断には限界がある。

城域については、東限を誠諦寺との境となる現道部分（B）、西限を主要地方道江戸崎新利根線が通る支谷に求められ、南限は台地の現集落、なかでも2~5mの比高差で一段高くなる標高10m付近より上を積極的に使用したとみられる。ただし、東限については誠諦寺の存在する台地の斜面部に削平地が認められることから城域に取り込まれていた可能性もある。台地続きの北限については、東から入る支谷によって台地幅が狭まるC周辺に想定されながらも、現況から積極的に痕跡を捉えることはできなかった。

調査区はC周辺に設定され、耕地境が鍵の手状を示している。この痕跡は発掘された1号堀跡と合致する可能性があり、堀の埋蔵を暗示するものかもしれない。いずれにしろ1号堀跡が検出されたことで、さらに北へ延びる要素は内在しているものの一応範張り上の北限は示されたことになる。

検出された1号堀跡の規模は小さく、上端幅4m、深さ1.7mである。覆土の状況からは人掛かりな埋め戻しや改修の痕跡はうかがわれず、廃城時にはこれに近い規模で機能していたものと判断される。堀の城内側には土星を設けているが、堀内に堆積した土星崩落土の量からすると主郭同様に小型のようである。



第7図 羽賀城跡概念図（1：2,000）

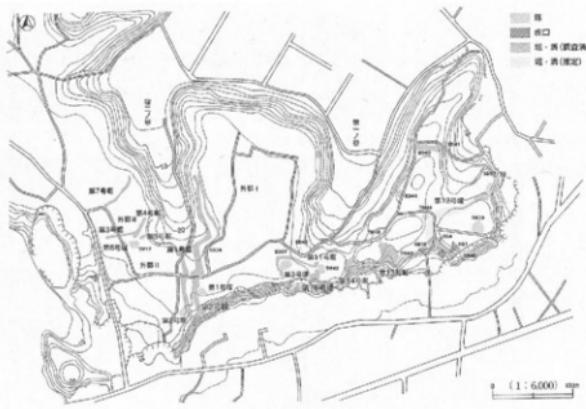
ただし、D周辺は、幅広の壇状地形が認められることから大型土壘の基底部である可能性もある。

1号堀跡については、城外側の堤壁上端部に小ピットが穿たれ、柵あるいは逆茂木が設置されている。今回の事例はピットの深度が浅いため逆茂木の可能性が高く、同じ様な状況がつくばみらい市に所在する小張城跡の調査でも明らかになっている。小規模な堀の防御力を高める施設であろう。とくに、現代の視点からみれば、この種の障害物の設置は城内備になされるものと思いがちであるが、本道跡や小張城跡の事例からは、城外側の堀上端の方が効果的であったことを示唆する。

さらに、注目されるのは、検出された堀跡が北進して台地を分断し掘り切るのではなく、南西方向には直角に向きを変えている実事である。この結果、比高差約10mを測る北西側の急峻な崖と堀の間は掘り残され、幅7mの帯曲輪cを作り出している。この構造は曲輪Ⅲ・Ⅳ北のbでも認められる。bの場合は、台地上と下を結ぶ道dの存在から、斜面の防御を意図したものと理解されるが、cは斜面に対するものではなく、むしろ通路が設定され、城内における中繼地点としての要素が高いのではないかと考えられる。

東北方向には隣接して中城古墳があり、現在も高さ2mの規模を持つ。中城古墳の周辺は、東西から支谷が入り最も台地幅が狭くなることから虎口が設けられ、前面に馬出的な小曲輪を伴う可能性も指摘でき、その場合古墳の障壁への転用も想定される。無論直接的に道跡は検出されてはいないため断定できないが、台地際を通り、cを経て曲輪Ⅵからの監視下、有事には攻撃に晒されながら曲輪内に導く動線を想定できる。この場合、全体構造をみると、曲輪I・IIを本城部分（実城）とすれば、曲輪VIは中城あるいは外城（外郭部）と認識されるもので、字名の中城は意味を持つものと理解される。このような設定は、同じ土岐氏系在地土豪の居城である長峰城跡（龍ヶ崎市）でも同様であった。

羽賀城跡の主郭部分に構築された堀は見事であり、4百年的時を経た現在でも侵入者を阻んでいる。これは、江戸崎城南方の防備を担った出城としての機能と、地域における役割を暗示するが、一方、土岐氏内における在地土豪の権力基盤を示すものであって、広大な空間は戦乱の絶え間ない社会状況を垣間見せてくれる資料といえる。



第8図 長峰城跡概念図
(茨城県教育財團文化財調査報告184集『長峰城跡（長峰遺跡・長峰古墳群）』より転載)

V 総 括

調査は、限られた範囲においてのみ実施されたものであるが、古墳の存在を示す埴輪片と中世の堀跡が検出され、遺跡が古代においては墓域、中世においては城館跡の一部として機能していることが明らかとなつた。

中世の成果については、前項で羽賀城との関わりを考察しているのでここでは省くことにするが、空堀の一部を検出した結果、これまで不透明であった城域の北限をおぼろげながら示せたのではないかと考えている。

古墳時代については、既に工事によって調査区の大半が失われていたため詳細な状況までは掴めないが、空堀の覆土中より円筒埴輪片が出土し、北東に中城古墳が位置することからこれと関連するか、あるいは、さらなる古墳の埋蔵を示唆するものと推測した。中城古墳は、現況で直径15m、高さ2mの規模を有するなどそれ以上の円墳と理解してきたが、検出された埴輪片はそれを一步進めたものといえよう。

また、調査区北西際の断面観察ではU字状の掘り込みが確認され、古墳の刷滝を示すものと期待された。しかしながら、表土直下の検出で時期不明の整地層に掘り込まれた可能性が高く、立地的にも台地際であるなど、積極的に古墳の周溝と判断するには至らなかった。仮に古墳が存在したとしても、中世の築城時に削平を受け消滅している。現在、第3回で示した通り、周辺において高塚の群集は認められていない。古墳の時期については、出土した円筒埴輪は脇部の細片であるため時期の特定は難しいが、概ね6世紀代に比定される。埴輪片の主である中城古墳、もしくは周辺に営まれた古墳は、この時期の築造と考えて大過ないと思われる。

羽賀地区は歴史的環境で述べたとおり、原始から中世へかけての遺跡の濃密な埋蔵が知られるものの、発掘調査事例は少なく不明な部分が多い。その中にあって限られた範囲での調査ではあるが、古代あるいは中世の人々の足跡を追えたことは、この地域の歴史を考える上で成果があったといえる。

参考・引用文献

- 住宅・都市整備公団つくば開発局 財團法人茨城県教育財團 1988 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17 屋代B遺跡Ⅲ」茨城県教育財團文化財調査報告第45集
江戸崎町史編さん委員会 1993 『江戸崎町史』江戸崎町
龍ヶ崎市史編さん委員会 1993 『龍ヶ崎市史 中世資料編』龍ヶ崎市教育委員会
龍ヶ崎市史編さん委員会 1998 『龍ヶ崎市史 中世編』龍ヶ崎市教育委員会
藤本正行 1999 「屋代城の堀底堅穴」「中世城郭研究」第13号 中世城郭研究会
江戸崎町教育委員会 2000 『姫宮古墳群』・2号墳 水神峯古墳
江戸崎町教育委員会 山武考古学研究所 2001 「精の台古墳群 - 第2・3次発掘調査報告書 - 」
都市基盤整備公団茨城地域支社 財團法人茨城県教育財團 2002 『長峰城跡（長峰遺跡・長峰古墳群）-竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書22-』茨城県教育財團文化財調査報告184集
鹿島神社遺跡調査会 伊奈町教育委員会 2006 『鹿島神社遺跡（小張城跡）-町道1560号線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』
樋詰 洋 2006 「羽賀城」「図説 茨城の城郭」 図書刊行会



調査区全景（北から）



遺跡遠景（南東から）



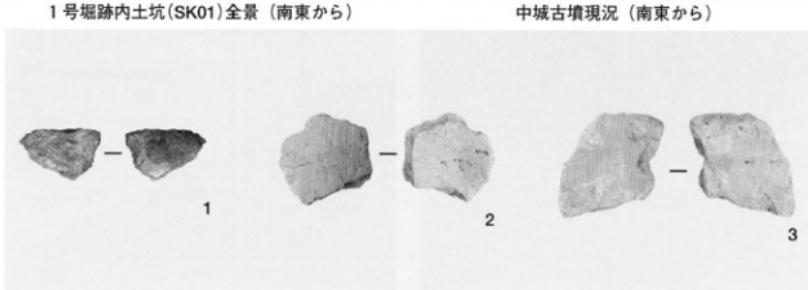
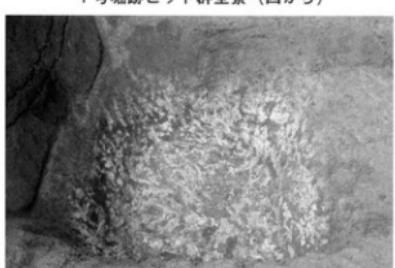
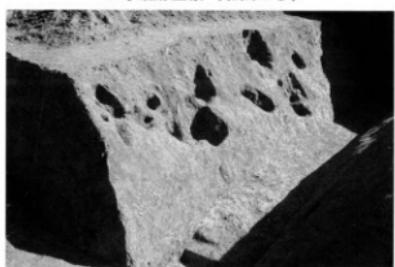
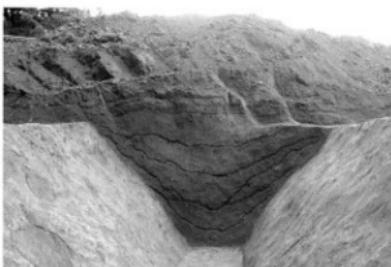
調査区北西側全景（北から）



調査区北東壁土層断面（南西から）



調査区北西壁土層断面（南東から）



報告書抄録

ふりがな	なかじょうこふんぐん						
書名	中城古墳群						
副書名	携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ名	稲敷市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第5集						
編著者名	野村浩史 國宮正光						
編集機関	株式会社 地域文化財コンサルタント 〒286-0201 千葉県富里市日吉台1-23-12 TEL: 0476-93-0770						
発行機関	株式会社 ヒメノ／株式会社 地域文化財コンサルタント 稲敷市教育委員会 〒300-0736 茨城県稲敷市八千石18-1 TEL: 0299-79-3211						
発行年月日	西暦2009年3月18日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号			
中城古墳群	茨城県稲敷市 羽賀貝中城1570番	441	040-2	35° 56' 16.32"	140° 17' 42.23"	2008.12.05～ 2008.12.25	204m ² 携帯電話基地 局建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
中城古墳群	城廻跡	中世	堀跡 1条	純文上器(箭頭) 埴輪(円筒埴輪)	出土した円筒埴輪は6世紀代に比定され、 中城古墳あるいは、さらなる古墳の埋蔵 を示唆するものである。 埴輪は不透明であったお質減跡の北隣を おぼろげながら示すことをとした。等高 からはピットが復出され、土壠と逆茂木 で防護していた事當がうかがわれる。		
要約	遺跡は、茲ヶ浦へ注ぐ小野川を眼下に臨む半島状台地に位置し、古墳の存在を示す円筒埴輪片と中世の空 堀跡が検出された。古代においては墓域、中世においては城廻跡の一部として機能していたことが明らか となっている。出土した円筒埴輪は岡崎区北東に隣接する中城古墳と関わるか、さらなる古墳の埋蔵を示 すものと理解され、遺跡は市に位置する羽賀貝城の一部とみられる。						

資料の取扱い

水洗い	・すべて行った。
注記	・次の略方にしたがって遺跡名、遺構番号、出土位置の順で注記した。 中城古墳群→ナカジョウコフンダン 墓跡→SD ピット→P 覆土→フク上 例) 中城古墳群1号墓跡南西側覆土→ナカジョウコフンダン-SD01-南西フク上
復元	・接合は全てに対して実施した。
実測	・遺構実測図は青線にて図面修正を加えている。 ・遺物実測図は報告書掲載分についてのみ作成した。 ・遺物実測図に拓図が伴う場合にはコピーを添付している。
写真撮影	・遺物写真是使用した遺物に対して全てデジタルで撮影した。 ・写真是撮影内容、方向、日時など必要事項を記載のうえ台帳を作成し収納した。
台帳	・遺物台帳、図面台帳、写真台帳があり、検索が可能なように作成している。
遺物保管方法	・遺物は報告書使用の遺物番号で統一した。 ・出土遺物は報告書使用と未使用に分け収納した。

稲敷市埋蔵文化財調査報告書第5集

中城古墳群

携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成21年3月16日 (2009) 印刷

平成21年3月18日 (2009) 発行

編 集 株式会社 地域文化財コンサルタント

発 行 株式会社 ヒメノ

株式会社 地域文化財コンサルタント

稲敷市教育委員会

印 刷 株式会社 ライフ TEL 0476-24-1564
